

かかしのはなし

土野孝太郎

村のかかしに眼鏡をかけさせてやろう、というのが彼女の思いつきで、それはかかしが人々の暮らしを見守る役目に就いてからもうずいぶん経っており、いかげん何かないと見張りを続けるのも辛いだろうという理由から提案されたようであった。それにあれほど長い間ひとところに留まっているのだ、きつとかかしはその眺めを大変気に入っているに違いないが、しかしたまには異なった景色を見てみるのも目の保養には非常によろしいことで、ならばより遠くまで鮮明に風景を見渡せる眼鏡をプレゼントすることは、かかしにとっては日々の責務に対する何よりの労いになるはずだとも言った。

僕は彼女との長い付き合いの中で、彼女が以前か

ら度々そういった理解しがたい思いつきを実行に移しては村人たちを困らせているのを承知していたからそれほど驚きはしなかったけれど、いくらかかしがいつも独りで同じ場所に変わらず突っ立っているからと言って、それはそこから見える景色をかかしが特別に愛してそうしているという訳ではないのではないのかな、とだけ言っておいた。

彼女はそっか、と小さく溜息をついて、だったら眼鏡なんてあげても仕方ないかなあ、とひどく落胆していた。計画をすぐに反故にするのも彼女の悪い癖だ。

でも、彼女がとても純粋であることを、僕は知っている。

じゃあ、どうして？

ん？

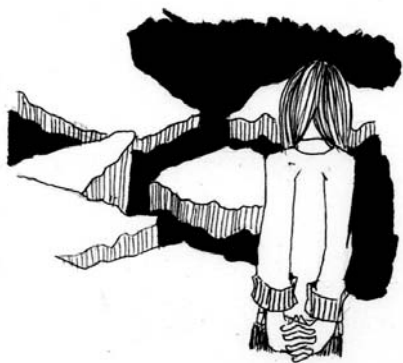
どうして、かかしはあそこにいるの？

僕は少し悲しげな、それでいて物分かりの良さそうな顔をして（自分で言うのもおかしな話だが、その時の僕は間違いないその様に形容されるべき表情をしていたと思う。かかしについて話をするときは、みんな申し合わせたようにそういう顔をしてみせるのだ）、そういうものだからだよ、と論すように答えた。今のかかしも、先代のかかしも、その前の更けにうんと昔のかかしも、彼らはずっと同じところにおいて、同じ景色を見つめ続けていたんだ。それはこの村では当たり前に当たり前な当たり前の習慣で、だからこそみんなは幸せでいられる。みんなかかしに感謝しているんだよ。

わからないよ。彼女は呟いた。かかしの幸せはどこにあるの？

わからないよ。僕はもううんざりしていた。かかしはみんなに幸せをあげるんだ。ねえ。あたし、かかしをあそこに連れて行きたい。

そう言っただけで彼女は唐突に思い出話を始めた。僕は以前にも一度その話を聞いている。それは彼女が前



を訪れたひどく寒い北の地で、遠出を嫌がる僕に痺れを切らした彼女は、遠く離れた雪国まで一人で旅立ってしまったのだ。みんなは彼女を非常識だと言ったけど、僕はそんな彼女の自由を羨ましくも感じていた。

旅行から帰ってきた彼女は、山のような土産話に添えて、僕に一枚の写真を見せてくれた。そこに写された風景を、僕は今も忘れないままでいる。流水というのだろうか、知らない海に、見上げるほど大きな氷の塊がいくつも浮かんでいる、僕が生きる世界から遙か遠い、その情景を。

なんだかおそろしいね、と僕は言ったと思う。

彼女は何と言って返したんだっけか。

そんなの無理だよ。

どうして無理なの？

どうしても無理なの。

彼女は悲しそうだった。そんなのつてないよ、と首を横に振った。好きな人にそんな表情をさせてし

まったことを僕は後悔したけれど、僕は間違っていないのだ。きつとみんなそう言ってくれる。だから僕はそれでこの話をおしまいにし、自分の作業に没頭することにした。彼女はまだ何か言いたそうに時折こちらに視線を寄越していたものの、僕がだんまりを決め込んでいると、遂に諦めたのか、再び無言で手を動かし始めた。

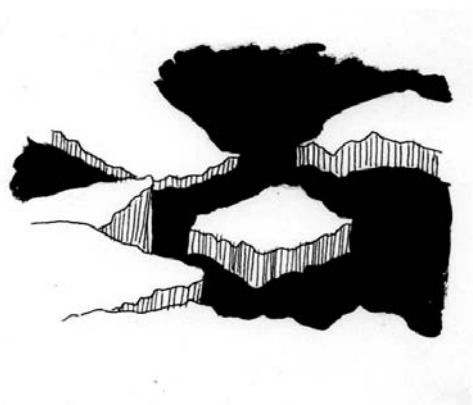
それきり、しばらくは沈黙が続いていた。僕と彼女にはそれぞれやらなければならなかったことがあったし、僕はどちらかと言えば静謐を好む人種であったため、このまま今日も時間が過ぎて、彼女が自分の部屋に戻り、僕は僕でそこそこに仕事を切り上げて眠り、いつもの明日が来るのを待つことを望んだ。かかしはそういうみんなを見守っていてくれる。ずっとそうしてきたのだ。

あんな話をしたからだろうか、いつのまにか、僕の頭はかかしについて考えていた。かかしは今頃、どうしているのだろう。夜が更けたこんな時間になっても、変わらず暗闇に立ち続けている独りぼっちのかかしを想像した。

なに？

かかしに幸せをあげるのは、いけないこと、なの？

どう答えればよいのか分からない僕は、多分、間違ってしまった。



眼鏡を貰ったなら、遠い地に連れて行ったら、かかしは喜ぶのだろうか。
時の進む音だけがする。彼女はまだ、黙っていた。次第に僕は、何か伝えなければならなかったことがある様な気がして仕方がなくなっていた。彼女をあれだけ無視しておいて。しかし気持ちにはひどく焦るのに、いつまでも経っても適当な言葉が出てこない。それは例えば、どうしてそこまでかかしにこだわるのかという非難じみた疑問であるとか、或いは、これから一緒に居て欲しい、という唐突な告白であるとか。でも、それら全てが何だか僕の勝手な言い分に思えてしまつて、結局僕は、その沈黙を破ることができなかった。

そうしている内に、彼女が自分の部屋に行く時間になった。僕は内心焦りを覚えながら、今日はもう遅いから部屋に戻りなさいと言った。彼女は素直に小さく頷いて、ただ、立ち去る直前、背を向けたまま、最後に僕に質問をした。

ねえ。

いけなくはない。でも、いらぬことだよ。
嫌なの。
……。

間違ってしまったのだ。

「あたしはそれじゃ嫌なの。」

翌朝になって、かかしがその姿を消しているのが
発見された。噂は一日で村中に広がったので、直接
確かめに行くまでもなく、僕の耳にも自然とその事
件は伝わってきたのだ。村を見守るかかしがいなく
なってしまうって、これは大騒ぎになるのではないかと
僕は内心穏やかでなかったのだけれど、村のみんな
は意外なほどかかしに執着を見せなかった。しか
しそれでも、そう遠くないうちに次のかかしが立て
られるのは間違いないと思われる。みんなにとって
重要なのは多分、かかしそのものではなかったのだ。
もしかしたら過去にも同じ様なことは起きていたの

かもしれない、その度に新しいかかしが用意され
ていたのだろう。それもそういうものなのだと思う。
そしてまさかというかやはりというか、彼女もい
なくなっていた。部屋の机の上の書き置きに、北へ
行きます、今までありがとう、とだけ残して。
彼女はまた、旅立ってしまった。そしてこの村に
戻ってくることはもうきつとないのだろう。だって
今回は一人じゃないのだ。彼女にはかかしがいる。
彼女とかかしの無事を祈る。

数日経って彼女の部屋を片付けていたら、ケース
に入った眼鏡を見つけた。どうやら彼女は計画を実
行に移す寸前だったらしく、深いトルマリン・ブル
ーの包装紙でラッピングされたそれには、ご丁寧に
純白のリボンまでかけられていた。少しためらわれ
たが中身を取り出して、彼女の好みであろうその細
身の銀縁眼鏡をかけてみたところ、なんとそれは度
の入っていない伊達眼鏡だった。彼女は遠くの綺麗
な景色を見せてあげたいと言っていたのに。

僕は彼女じゃなくてこの村を選んだ。選んでしま
ったのだ。ガラス越しの世界が不意に歪んで、意味

ないじゃねえかこんなの、とだけ、言葉が漏れた。

